

No.2514

太平洋諸国における接触言語の比較研究

東京大学大学院総合文化研究科 准教授

松本 和子

植民地政策の足跡が色濃く残る太平洋諸国では、旧宗主国言語が土着語と共存・連関・交替する過程の中で様々な接触を繰り広げ、各地で多種多様な「接触言語」を誕生させてきた。従来は主としてその特異性に関心が寄せられていたが、近年は接触言語間の共通性を検出する研究が注目を集めている。申請者のこれまでのパラオ日本語・パラオ英語の研究の中でも、オセアニアの他の接触言語との間に一定の類似点は散見されたものの、調査・分析手法に差異があるため、必ずしもその有効性を論証できるものではなかった。このため、本研究では大洋州で形成された接触言語を研究している専門家と共に、同一の調査・分析手法を用いた比較研究を行い、接触言語間における共通性・相違性を明確にすることを目指している。

本年度は、パラオ日本語とニュージーランド英語の形成過程、言語変容の「対話上の機能 (interactional functions)」および「社会的・情緒的機能 (social and affective functions)」、さらに言語内的・外的諸要因を調査分析した。具体的は、これまで行ってきたパラオ日本語でみられるタグ (tag) の新用法の研究 (松本 2013) を総括しつつ、ニュージーランド英語のタグとの比較考察を行った結果、「ネガティブ・ポライトネス (negative politeness)」としての語用論的機能を持つ言語使用が増加する傾向にあるという類似性を指摘することができた。「ネガティブ・ポライトネス」とは、話者間の距離を縮め、仲間意識をかもし出そうとする言語行為を指す。つまり、宗主国から大量の定住移民を受け入れてきた太平洋諸国では、当初、地元住民と定住移民間の連帯意識が希薄であったため、その距離を縮め仲間意識を強化しようとする話者の動機から、敢えて「ネガティブ・ポライトネス」としての語用論的機能を持つ言語使用を積極的に取り入れる方向へと言語変化が進んだのではないかとする松本 (2013) の仮説を支持する結果を得た。

【参考文献】

松本和子 (2013) 「パラオ日本語の語用論的変異と変化」『オセアニアの言語的世界』
220-269. 溪水社.